

松下幸之助記念志財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word)

【氏名】王令薇

【所属】(助成決定時) 桃山学院大学社会学部 非常勤講師

【研究題目】昭和 50 年代における中学生の国際交流のメディア史

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、昭和 50 年代における東南アジアの国々との交流を促すという中学生国際交流活動の新たな展開およびメディアとの関わりに着目し、事業の背景と中学生の国際文化交流に参加する意欲への影響を明らかにすることである。具体的に、1979 年に国際児童年の記念行事の一環である「子ども海外特派員事業」(フィリピン、インドネシア、マレーシア、シンガポール、タイの東南アジアの 5 つの国、スリランカ、インド、ネパール、バングラデシュの南アジアの 4 つの国、香港と韓国に中学生を 10 日間派遣した事業) や、1980 年代において「少年の主張全国大会」上位受賞者への副賞として実施された「日本・インドネシア子供相互交流計画」などの取り組みに着目する。当時の中学生たちがどのような思いで東南アジアの子どもや若者と関わったのかを考察することは、外国との交流意欲が低下している現状(第 10 回 NHK「日本人の意識」調査)を考えるうえで一つの手がかりとなるだろう。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究の対象となるのは、1979 年に国際児童年の記念行事の一環である「子ども海外特派員事業」や、1980 年代において「少年の主張全国大会」上位受賞者への副賞として実施された「日本・インドネシア子供相互交流計画」といった日本の中学生と東南アジア諸国の子ども・若者との交流活動であり、メディアイベントでもある。そのため、研究方法に関して言えば、事業報告書だけではなく、マス・メディアの報道の収集・整理・分析をも積極的に行った。また、当時国際交流イベントに参加した中学生が執筆した記事も収集した。さらに、社会教育学、青年心理学、メディア文化研究、国際関係論、東南アジア史といったように、多岐にわたる研究領域に関連するテーマであるため、多くの文献を渉猟した。

昭和 50 年代は、「政治の季節」から「バブル文化」に変わっていく転換期であり、「キャッチアップ型近代」の終焉、言い換えれば、欧米と違った成長モデルを採用または創出する必要性が一般大衆にも意識されはじめた。同時代の大衆メディア文化を検討する研究がすでに綿密に行われ、本研究の関心でもある日本人の発展途上国への眼差しに関して言えば、青年海外協力隊への「加熱する憧れ」についても論じられた(福間良明編『昭和五〇年代論』2022)。また、消費社会化の進展を伴い、NHK《青年の主張》において途上国との国際交流を重視する「豊かさのコンプレックス」が 1980 年代において「貧しさのコンプレックス」を取って代わっていったプロセスを描き出した佐藤卓己(2017)『青年の主張』や、青年海外協力隊が管理社会における自己解放、日本社会が失ったモデルのオルタナティブとしての「豊かな第三世界」と、「悲惨な第三世界」への援助といった理想の交叉点にあったと指摘している白戸健一郎(2022)「交叉する理想」福間良明編『昭和五〇年代論』が挙げられる。また、若者の初めての海外旅行の文化史には、山口誠(2010)『ニッポンの海外旅行』も参考になる。1980 年代後半、アジア、特に東南アジアで自分探しのバックパッカー旅行をする若者が現れ始めた。以上を踏まえ、本研究では東南アジアイメージと中学生の「自我」との関係に着目して分析を行った。

## 【結論・考察】(400字程度)

いただいた助成金を活用して上述した資料を入手することができた。国際文化交流に参加した中学生の作文を考察したところ、主に 3 つのパターンが存在する。①途上国の伝統的な文化や生活様式、自然環境が損なわれていないこと、つまり「豊かな第三世界」への憧れ、②第二次世界大戦の日本の侵略や日本の資本の過度な

投下への反省、③途上国で直接得た「知」を、自分が社会貢献できる将来像と結びつけることの 3 つである。異なるメディアにおける各パターンの割合を比較することを今後の課題としたい。ASEAN 諸国の青年の招へい事業（「21 世紀のための友情計画」）が 1984 年に開始され、中学生は海外に行かずに外国の若者と接触することが可能となった。中学生がホームステイ参加などの日本国内での国際交流活動や、1990 年代後半以降のインターネットを通じた海外の人々とのより日常的な交流についても考察し、本研究の成果を長期的かつ通時的な研究へと発展させたいと考える。